

令和3年度

福祉作文

WELFARE COMPOSITION



社会福祉法人
赤穂市社会福祉協議会

「笑顔があふれる福祉のまちづくり」



社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

理事長 児嶋佳文

新型コロナウイルスの世界的拡大により、社会には多くの制約がもたらされ、生活のあり様が大きく変わることとなりました。コロナ禍において、人と人が互いに接触する機会を減らすことを求められ、これまで地域において、人に寄り添い、つながりづくりを進めてきた住民活動にとって力を発揮しにくい状況になっています。更に、生活困窮者の増大等、福祉ニーズはよりいっそう高まり、様々な生活・福祉課題が複雑化・深刻化しています。

誰もが安心して暮らすことができる福祉のまちづくりを使命とする社会福祉協議会には、こうした今日的な地域福祉の課題を受け止め、地域のつながり、支えあいを強化しながら、その解決に向けた取り組みが強く求められており、今後とも市民の皆さまをはじめ、関係機関等と連携・協働し、笑顔があふれる地域づくりの推進に努めてまいります。

中でも、次世代を担う子どもたちの福祉教育の推進は特に重要であり、社会福祉協議会では、従来から赤穂市や学校園はもとよりボランティアの皆さんと連携を図りながら、心のふれあいと思いやりが体感できる福祉教育の推進を図っており、今後さらにそれらの支援を充実させてまいりますので、これまで以上のご協力を賜りますようお願いいたします。

本年度も福祉の問題は「地域で暮らす方の身近な課題である」ということを認識していただくため、「福祉作文」を募集しましたところ多くの作品の応募があり、いずれも心に響く作品でしたが、その中から優秀作品を選び、「赤い羽根共同募金」の配分金をもとに文集を作成いたしました。

この文集が大勢の皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、助けあい、大切にしようとする気持ちたちが社会に広がり、本市の地域福祉が向上することに少しでも役立てれば光栄です。文集の発行にあたりまして、作品を応募していただきました皆さま、ご指導、ご協力をいただきました学校関係者の皆さまに深くお礼申し上げます。

令和三年十二月

福祉作文

小学生の部

| | | | | |
|----|-------------------|----------|-------|----|
| 大賞 | 千分の一のプレゼント | 御崎小学校六年 | 川畠蓮生 | 1 |
| 特選 | 目には見えなくても | 尾崎小学校六年 | 吉永直矢 | 3 |
| 入選 | 私の大切なお母さんへ | 塩屋小学校五年 | 西山笑琉 | 6 |
| | パラリンピックと新型コロナウイルス | 高雄小学校五年 | 寺田知歩 | 7 |
| 佳作 | 大切なマスク | 赤穂小学校四年 | 新田栞菜 | 9 |
| | つらい経験から良い経験へ | 城西小学校六年 | 中山楓太 | 11 |
| | てんかんを起こして | 塩屋小学校六年 | 山口遼 | 13 |
| | ぼくにもできるボランティア | 赤穂西小学校六年 | 山下龍一郎 | 14 |
| | ホーリーとの思い出 | 尾崎小学校六年 | 小川桔平 | 16 |
| | ぼくに行えること | 御崎小学校六年 | 中野創介 | 17 |

高校生以上の部

| | | | | | |
|----|----------------|----------|---------|----|----|
| 大賞 | 笑顔の素敵なあの人になりたい | 赤穂高等学校二年 | 安部 栞菜 | …… | 44 |
| 特選 | 障がいのある子の未来を考える | 一 般 | 森 本 由香里 | …… | 46 |
| 入選 | 思いやりと優しさが築く未来 | 赤穂高等学校二年 | 北 岡 茉 凜 | …… | 48 |
| | 寄り添える社会へ | 赤穂高等学校二年 | 桑 原 悠 人 | …… | 49 |
| 佳作 | 自分たちが支える | 赤穂高等学校一年 | 大 谷 庵 | …… | 51 |

※「障害」や「障害者」などの「害」の字はひらがな表記にしています。
ただし、法律名については漢字表記にしています。

小学生の部 大賞

千分の一のプレゼント

御崎小学校六年 川 畠 蓮 生

みなさんはダウン症について知っていますか。

ぼくには七才の小学二年生の妹がいて、その妹にはダウン症があります。七年前、ぼくはお兄ちゃんになりました。妹が生まれた日の事を思い出すと、自分がお兄ちゃんになったと言ううれしさと自覚を感じました。その時は妹がダウン症であることは知りませんでした。ただ、お父さんが、「耳が小さい、耳が低い位置にあるなあ。」とつぶやいていた記憶があります。

入院から二、三日経ったころ、妹とお母さんに会いに病院に行くと、なぜかお母さんがずっと泣いていました。ぼくは当時幼稚園児で幼いながら何かあったのだろうと思いました。

その後、妹は検査で、ダウン症と正式に診断されました。

ダウン症とは健常者とはちがって、とてもゆっくりと成長していくもので、また知的なおくれもともないです。それだけではなく、心臓に穴があいていたり、耳が聞こえにくかったり白血病になったりと数々の身体的な病気を合併する障がいのことです。

二十一トリソミーとも別名言われています。染色体の異常で、健常者はふつうは二十一番目の染色体が二本のところ、妹の場合は一本多かった事が原因でダウン症になりました。

お母さんは妹の障がいのことをうけとめられず、ずっとふとんの中で泣いていましたが、妹が一才になったころ、救急車で遠い病院まで運ばれ、命のきけんがありました。一命はとりとめました。その後妹は何度も入退院をくり返し、はなればなれの生活をしていました。妹は、大きな病院で大きな手術を小さな体でのりこえてきました。

お母さんから聞いた話ですが、染色体異常の赤ちゃんは、おなかの中で生きられず、十人のうち九

人の赤ちゃんはおなかのなかで死んでしまっています。それを聞いたぼくは「とてもとても強い命なんだなあ。」と思い妹をそんけいしています。

いろんな困難を乗り越えて、妹は今元気に、特別支援学校に通っています。妹はずっとニコニコしているし、毎日を楽しく生きていて、とても羨ましく感じます。まわりの空気を読むのが得意で、例えばぼくが元気がなさそうにしていると、妹がぼくの顔を覗き込み「大丈夫」と言って頭を撫でてくれます。あとはとにかくかわいいです。一緒にいてとにかくいやされます。妹は、ぼくにないいいところがたくさんあります。妹がいない生活なんて考えられませんが、成長はかなりゆっくりですが、練習や訓練をくり返すことで、できるようになる事もたくさんあります。意外に、人が言っている事をよく分かっているのです、妹のプライドをきずつける事は注意が必要です。

障がいを持つ妹と外出すると、他人からの視線をあびる事もありますが、ぼくはまったく気になりません。なぜなら、妹はとてもかわいい家族だからで

す。妹のしゃべる言葉ははっきり聞きとりにくい方が多いのですが、ぼくは妹が言っている言葉はほとんど理解できます。

あれだけ泣いていたお母さんは笑っています。妹はとてもひょうきんでおもしろい事をして家族を笑わせています。

お母さんは今、医療の専門学校で将来リハビリの先生を目指す学生さんに向けて授業する先生をしています。その中で、ダウン症の事についても学生さんに伝えていきます。学生さんたちもダウン症の人に会った事が少ないのであまり分からない事も多いと言っていたようです。ダウン症について学生さんたちに伝えるお母さんは、とても生き生きして見えました。

ダウン症の子は千分の一の確率で生まれると言われて、千分の一を引き当てたぼくたち家族はラッキーだと思っています。

障がいがあることは大変な事も確かに多いですが、けっして不幸ではないと思います。

妹がいたからこそ、命の大切さや健康のありがた

みを学ぶ事ができました。

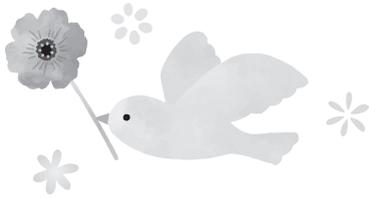
ダウン症の人の平均寿命は短く、四十才くらいで亡くなると言われています。短い人生ですが、ぼくも妹とたくさんの思い出を作っていきたいです。

ダウン症という名前は、イメージが悪いように聞こえますが、ぼくの妹に会うとまったくイメージが逆になるとぼくは思います。

まずはダウン症を知ってください。そこから障がい者への理解ができると思います。知ろうとする心が大切です。

一本多い染色体にはたくさんのやさしさがつまっていると思います。

妹へ、ぼくの家族になってくれてありがとう。



小学生の部 特選

目には見えなくても

尾崎小学校六年 吉 永 直 矢

ぼくは健康です。ぼくはここ二、三年で、自分が健康である事がいかに幸せな事であるかを実感しています。

ぼくのお母さんは、ぼくが生まれる前から持病を抱えています。今はかかる人が多くなっていますが、病名はパニック障がいです。

ぼくが小さい頃は、お母さんがパニック障がいだと聞いても、一体どこがどう悪いのか、全く分かりませんでした。お母さんは、見た目は他の人とはあまり変わらなくて、体内の臓器も、どこかつぶれていたり、傷んでいたり、働かない訳ではありません。でも、少し大きくなった今のぼくには、お母さんがパニック障がいだな、今、体が辛いんだな、とす

ぐに分かります。

お母さんは、朝が苦手です。眠いからではありません。どうして苦手なのかと言うと、起きて数時間後には、何かと出かける用事があるからです。ぼくは小さくてあまり覚えていませんが、今は少し病状がゆるくなっている出かける前の発作も、ぼくやお兄ちゃんが幼稚園に通っていた頃は、ひどかったそうです。

まず起きて、窓に近付いたり、カーテンを開けて、人が沢山いたらどうしよう、それだけで動悸と息切れが苦しくて、起きてカーテンを開けるのに何時間もかかったり、ひどい時は一日中開けられない事もあったそうです。

毎日毎日、ぼくとお兄ちゃんが楽しく幼稚園に通ってくれる事は嬉しいけれど、体がついていかない。何とか準備を整えて、玄関のドアの前に行くけれど、ドアを開けて一步を踏み出すのが怖い。今日はどうしても無理、と、泣いてしまう事もあったそうです。

ぼくは、幼稚園に行く前にお母さんが泣いている

日があった事を、うつすらと覚えていきます。もちろん、当時はなぜ泣いているかなんて分からないし、頭の隅に残っているだけで、気にとめていませんでした。

お母さんの様子を知ったのは、ここ二、三年です。ぼくが気付くようになったのと、聞くとお母さんが話してくれるからです。

一番気になったのは、お母さんは夜、あまり眠りません。いや、眠れないと言った方が合っているのだと思います。普段からあまり眠れないようですが、特に、ぼく達の入学式や卒業式、運動会、少年団の試合など、人が沢山集まるイベントの前日は、一睡もできない事も多く、ぼく達は心配で、何度も目が覚め、起きているお母さんの側で励ましたりしていました。

でも、お母さんは次の日に必ず来てくれます。お薬を飲んで、家に帰る頃にはぐったりしてしまっているお母さんに、

「何でそんなにまでして来るの？」

と、聞いた事もあります。

「あなた達が頑張っているし、時間は戻らないから。」
お母さんは決まってこう答えます。

でも時々お母さんは、周囲の人に心無い事を言われる事もあるそうです。

「気持ちの持ちよう。」

「体じゃなくて心の病気なんだから、体は元気なので休まなくていい。」

「何で普通の人ができる事ができないの。」

などです。でも、ぼくはお母さんがぼく達の為に頑張っている姿を見てみると、お母さんが病状を出したくなくても出てしまう事、人にそこをつつかれても、完治するまでは自分の気持ちでは病状をおさえる事ができない事が分かります。心無い事を言っている人は、足が痛くて歩けない時に、走れと言っているように聞こえます。

お母さんはいつも、そのように言われた時が一番辛そうで、必ず具合が悪くなります。お母さんの担当の先生も、治るまでゆっくり穏やかに過ごす事が大事だと言います。本当なら、毎日ゆっくり家で心と体を休めるのが仕事なんだから、本当は頑張らな

くていいのに、自分の事よりもぼく達の事ばかり気にかけてくれます。

「あなた達がそういう事に気付いて、人の痛みが分かる人になってくれた事が一番嬉しい。」

お母さんはよくこう言っています。

ぼくは思います。どんな病気の人も、その苦しみはその人にしか分かりません。目には見えないけれど…。お母さんが身を持って教えてくれた事を、今後ぼく達がどなたかに生かせますように。そして、お母さんのような病気の方々への理解が、もっともっとと広がりますように。



小学生の部 入選

私の大切なお母さんへ

塩屋小学校五年 西山笑琉

私の大好きなお母さんは、シングルマザーで私とお姉ちゃんと妹の三人を一人でそだててくれています。

お母さんに時どき、「いつも一人でそだててくれてありがとう。」と言うとお母さんは、ぜったいに笑いながら「お母さんが一人でそだてるとるとちゃうで。おじいちゃんやおばあちゃん、近所のおっちゃんやおばちゃん、学校の先生、小さい時は保育所の先生らもいっしょにそだててくれたんやで。みんなが協力してくれて、うちの子三人とも大きくなりよんやで。」と言います。

私は、小さいころからお父さんはいないけど、お父さんがいないさみしさはあまりありません。お母さんがいつも言うように、近所のおっちゃんやおば

ちゃんがよくパンをくれたり、おやつやジュース、とれたてのやさいもくれたりします。お母さんは、「ほら。みんな、こうやっていろいろくれるけど、これをあたまりまえと思ったらあかんのやで。毎日大切にそだてたやさい、ほんまやったらおっちゃんらが食べるやさいをいただくんやから、ほんまにありがたいことなんやで。」と教えてくれました。

私のお母さんは、毎日私たちが学校に行く時間よりも早く家を出て仕事に行っています。いそがしい時だと夜の七時ぐらいになったりもします。おそい時のばんごはんは、おべんとうを買ってきて、お母さんは「今日はおべんとうでごめん。作る時間ないわ。」と言いますが、みんなで食べるおべんとうは、めっちゃおいしいです。

お母さんが「シングルマザーでさみしい思いさせてごめん。でも楽しくしよな。」と言っていますが、私は楽しい事がいっぱいあります。

まず一つ目は、土曜日によくおばあちゃんの家におとまりに行きます。おばあちゃんの家では、家でできない夜ふかしをたまにします。アイスを食べ

たり、テレビを見たり、でも自主学もおそくまでしたりします。いつも土曜日になると、今日はおとまりしてもいいかな？行きたいなあと考えています。

二つ目は、家族でお出かけすることです。お母さんは車が好きなので、どこでも車でつれて行ってくれます。一番遠い所は、鹿児島県の桜島まで車で行きました。愛知県のレゴランドや大阪や京都にもつれていってくれます。知らない人は、「お父さんがおらんかったら、遠い所とか行けんやろ。」と言っています。ですが、ぜんぜんこまったことはないです。

私たちだけじゃなく、お友達の中にもシングルマザーの家族、シングルファザーの家族がいます。みんな私たちの家族のようにいっぱい笑って、楽しそうにしています。

シングルマザー、シングルファザーはかわいそうと思う事を少しでもへってくれたらいいなと思います。私たち家族は、これからも、たくさん楽しい思い出を作りたいです。そのために、お母さんに仕事をがんばってもらって、私とお姉ちゃんと妹でお母さんのお手伝いをしたいと思います。

パラリンピックと新型コロナウイルス

高雄小学校五年 寺 田 知 歩

私がなぜ福祉作文のテーマにパラリンピックを選んだかの理由は、四年に一度行われるパラリンピックが今年東京で行われるからです。東京二〇二〇パラリンピック大会は、二〇二一年八月二十四日から九月五日までの十三日間、日本の東京で開きいされる第十六回パラリンピック。新型コロナウイルス感染症しゅうを受け、二〇二〇年夏のかいさい予定から一年えんきして開きいされています。

まず最初に、パラリンピックの歴史について調べました。パラリンピックの始まりは、一九四八年、今ではパラリンピックの父とよばれる医師ルード・ウイツヒ・グッドマン博士の考えによって、ロンドンこう外のストーク・マンデヒル病院内で開かれたアーチェリーの競技会です。第二次世界大戦で主に脳から連続する神経をそんしょうした兵士たちの、リハビリの一つとして行われたこの大会は回を重ね

ね、一九五二年に国際大会になりました。その時は、リハビリテーションのためであったスポーツが、現在はアスリートによる競技スポーツへと発展しています。出場者も「車いす使用者」から対象が広がり、もうひとつのオリンピックという意見で、「パラリンピック」という公式名しようも決められるまでになりました。私は、パラリンピックの始まりを知らない人が多いと思うので、東京パラリンピックを機会に、みんなに知ってほしいです。

私の一番応えんしている選手は瀬立モニカ選手です。モニカ選手はカヌーの選手です。私は一度カヌーをしたことがあってモニカ選手に興味を持ちました。モニカ選手は中学のころカヌー部に所属していた。東京国体を目指していたけど、高校一年生の六月、体育の授業中、倒立前転でバランスをくずして脳と胸椎損「外傷性脳損傷、中等度両下肢まひ、体幹機能障がい」で腹筋や下半身を使うことはできず、車いす生活となったそうです。カヌーは腕の力だけでこぎ、クラスは最も重いL1。そんな状態なのに、一年間のリハビリをがんばり、二〇一四年、パラカ

ヌーという形で競技復帰されたそうです。リオデジャネイロパラリンピックに出場し、八位入賞しました。カヌーにはパラリンピックのメダルかく得とともに、体の機能回復を目指して取り組んでいます。

私はモニカ選手のことを調べて、最も重いクラスL1なのにあきらめずにトレーニングを続けていて私には、できないと思います。それに、メダルかく得だけじゃなくて、体の機能回復も目指しているなんて、そんなけいします。モニカ選手をはじめパラリンピックに出るのを目指した選手たちは身体に障がいをもち、つらかったと思います。今、コロナで、練習かんきょうもたいへんになっているので、なおさらそうだと思います。私の通う学校でもコロナウイルスから生徒を守ろうと先生たちは三密を防いだり、消毒をしたりしてくれています。私は感謝の気持ちをもって、生活しようと思います。コロナのせいでいつも通りの生活にはまだもどれないけど、今も、これからも人と人はずつつながっていかなければいけないと身をもって思います。コロナがはやる前の私にとってはあたり前と思っていた生活が、

あたり前じゃないとコロナで、気づかされました。これは学校だけではなく日本中だったのかも、と私は思います。

選手たちもコロナと向き合って戦っている、私は心の底から応援します。

私が大人になったら、子どもたちに「子どものころコロナがいつぱいはやって大変だったんだよ。でもみんなでコロナに勝ったんだよ。」と伝えたいです。そのために、手洗いうがいを徹底し、三密を防ぐために遊びに行きたい気持ちを抑えて、コロナに打ち勝ちたいです。



小学生の部 佳作

大切なマスク

赤穂小学校四年 新田 葉菜

わたしたちは今、コロナウイルスとたたかいたがままに生きています。その中でたくさんのことをがまんしながら生活しています。今までふつうにできていた友達とおしゃべりしながらごはんを食べることも電車や飛行機に乗って旅行をすることもできません。でも、1年たった今でもなかなかおさまりにありません。わたしは早くおさまってふつうの生活にもどりたいです。そして大好きな友達と一しょに遊びたいし、旅行にも行きたいです。

この話はちょうどコロナが出はじめた3月の話です。

わたし達は2年生の3月から学校が休みになりました。なので、わたしは、毎日お母さんの仕事場の

二階で勉強をすごすことになりました。お母さんの仕事場は薬局です。2階にいますと、下から利用者さんが薬ざいしさんに相談する声が聞こえてきます。そしてみんな薬ざいしさんの話を聞いて、安心して薬をもらって帰っていきます。その中で勉強をすごしていました。

ある日、薬局に着くと、利用者さんのおじいさんが薬局の前でまっています。おじいさんはお母さんを見つけると、「昨日、ドラッグストアに行ったら、子ども用のマスクを見つけたよ。小さい子どもがいらっしゃるでしょ。使ってあげて」と言っ、マスクをわたしてくれました。マスクが今、どこにもなくて、お母さんがさがしまわっているのを知っていたので、わたしもびっくりしました。

そして、おじいさんに「ありがとう」と言いました。おじいさんにはっこりわらって帰っていきました。

おじいさんは、毎日わたしと妹が薬局に来ている所を見ていて、気にかけてくれていたみたいです。わたしと妹のことを気にかけてくれていたことがうれしかったし、あたたかい気持ちになりました。

みんなマスクがなくて、朝早くからドラッグストアにならぶくらいこまっている時に、自分のことばかりではなくて、周りの人のことも考えてあげられるやさしい気持ちがわたしはとてうれしかったです。おじいさんもマスクがほしいのに、わたしと妹のために子ども用のマスクをかって来てくれたことに本当にかんしゃしています。

つつい、大変なじょうきょうになると自分のことばかりになって、周りの事が見えなくなりますが、でも、そんなじょうきょうの中で、おじいさんがマスクを買って来てくれたことは本当にすごい事だと思います。その時におじいさんからもらったマスクは、まだ使わずに大切に引き出しにしています。おじいさんの気持ちがとてうれしくて、使うのもつたいなくて使えません。マスクを見ると、すごくあたたかい気持ちになります。

わたしは、マスクがなくて、おじいさんもほしいのに、自分のことよりも、周りの人のことを先に考えてあげられるおじいさんをそんけいしています。わたしもこれから自分のことばかりではなくて、

周りの人に目を向けて、考えてあげられる人になりたいです。そして、こまっっている人の手助けをしてあげたいです。おじいさんのような周りの人のことを先に考えてあげられる人達がふえた世の中になれば、困っている人や苦しんでいる人が一人でも少なくなるだろうと思います。きつともつともつと住みやすい世の中になるはずです。わたしもそういうことがしぜんとできる人になりたいです。

コロナウイルスが日本に入って来てから、わたしたちはたくさんの人々をなくして、たくさん悲しい思いもし、日じょうの生活ががらりと変わってしまったいました。うしなつたものは大きいけれど、コロナウイルスにより学んだ事、えたこともたくさんあります。コロナウイルスがなければ、おじいさんのあたたかい気持ちを知ることありませんでした。つらいじょうきょうだからこそ、みんな助け合つて乗りこえていくことが大切であることをおじいさんのマスクから学ぶことができました。

わたしもこれからは、周りの人に目を向けられる人になりたいです。そして、一人でも多くの人をえ

顔にしてあげられる人になりたいです。

おじいさん、本当にありがとう。

つらい経験から良い経験へ

城西小学校六年 中山 楓 太

これは、ぼくが経験した、今年の四月の話です。

ぼくは、スケボー中に、技をしていて着地に失敗した時に、「いたい！」と思つたしゅん間、ぼくの右手はあつという間にはれて、全く動かすことができまませんでした。痛みも、いつものケガの痛みよりもはるかに痛くて、「もしかして骨折かも」と悪い予感がしました。その予感は当たつていて、ぼくは、右手首の骨にヒビがはいつていました。そして、治りょうのために、シーネという装具を右手首から右ひじまで固定をして、右手を動かすことができない生活が始まりました。

ぼくの利き手は右手なので、その日からぼくは、

色々な事に対して、不自由な思いを経験することになりました。

例えば、食事をする時、おはしが使えないので、スプーンやフォークを使ったけど、上手く使えずたまに、こぼしてしまうこともありました。また、お風呂では、かみの毛と体をあらえなかったり、学校生活では、授業の内容をノートに書くことができなかったり、水とうのお茶のフタを開けることもできなかったりしました。

その不自由な生活の中で、ぼくの周りは、家では、お母さんやお父さんや妹にも手伝ってもらい、学校では、周りの友達にぼくが、手助けをしてもらうようにたのみ、ぼくがたのまなくても、重い荷物もだまって持つてくれる友達もいて、ぼくは周りの人の手助けが必要な生活が、二ヶ月ほど続きました。

その間、ぼくは「はやく治って前のように自由な生活がしたいな」とずっと思っていました。その時お母さんが、「ふうたが不自由な思いをしている時に、友達が助けてくれてよかったね。良い友達ばかりだね」とよく言っていました。その時は、お母さ

んに対して、「そうやな」と軽く返事をしていましたが、右手のケガが治って右手が自由になったころ、ぼくはふと思いました。

それは、「右手が自由に動かせるようになって、今では、周りの手助けが必要ではないけど、車イスをずっと使っている方はどんな思いをしているのかな」と考えました。

なぜなら、ぼくの場合、手助けを必要とする時に、ぼくのケガの事を理解してくれる人達がいたけど、もしぼくが、町の中で不自由な思いをした時に、「すみません、手伝って下さい」と言えるのかな。もしかしたら手助けをお願いしにくい人ばかりなら困るのではないかと考えたからです。そう思ったら、今は、手助けが必要な人が、自らお願いをしなくてはいけない世の中なのではないのか。

例えば、にんしんをしている人が持っているマタニティマークや、内臓の病気や義足をしている人が外見でわからないので、周りの人に理解してもらうようにカバンにつけるマークがあるように、手助けを必要な人が、アピールをしなくてはいけないのが

現状だと思っています。

なぜ、周りの人が「大丈夫ですか？お手伝いすることがあれば言っておきたいね」と示す様なマークはないのかな。そうすれば、手助けが必要な人は、周りの人に遠りよをせずに過ごしやすいくなるのではないかと思いました。

まず、ぼくができることは、車イスを使っている方が道路やお店の中にいたら、車イスが動きやすいように間かくを空ける。そして、電車の中では、高齢者の方、にんしんをしている方がすわる優先シートにはすわらないようにします。

今回、ぼくは、右手のケガで、最初は不自由でつらい経験ばかりだと思っていただけ、今までにない良い経験に変わりました。

これからも、周りの人に支えてもらった事を忘れずに、この経験を生かして、今度はぼくが周りの人を支えてあげたいと思います。

てんかんを起すこと

塩屋小学校六年 山口 遼

ぼくは、幼稚園年長の時、けいれんを起こしました。ぼくは全然覚えていないのですが、一回目は、九月の夜、布団に入り、寝入った頃発作を起こしました。お父さんは仕事で不在で、お母さんはびくびくとして様子がおかしく、何度呼びかけても反応のないぼくにびっくりして、救急車を呼ぶことをためらったものの、まだ小さい弟が二人いたので呼んだそうです。二回目は、一月の昼間、庭で弟と遊んでいる時に起こしました。この時もお母さんが名前を呼んでも全然反応がなかったので、病院へ連れて行き、大きな病院を紹介され、血液検査やMRI、脳波検査をして、はっきりした原因が分からないまま、初めて「てんかん」という病名がつかまりました。「てんかん」は、ぼくの場合、何の前ぶれもなく突然起きました。意識がなくなり、気付いた時には病院で点滴を受けていました。

ぼくに「てんかん」という病名がついた時、家族はとても心配してくれました。もしまた発作を起こしたらどうすればいいのか、家以外のところで起こしたらどうすればいいのか、いろいろなことを考えました。

「てんかん」について何も知らなかったお母さんは、周りの人に言おうかどうか迷ったそうですが、かくすことでもない、どちらかといえば身近な人にこそ伝えておくべきだと思ったそうです。症状、もし発作を起こした時の対応など、お医者さんに聞いたことを機会があれば伝えました。すると、

「自分もそうだよ。」

「弟が小さい時起こしたことがあるよ。」

など、周りに同じ経験をした人が多くいて、普通に話してくれたことに気持ちが悪くなり、希望を持つことができたそうです。

それからぼくは、三年間抗てんかん薬を飲みました。少しずつ量がへっていき、飲まなくていいようになりました。学校を早退して、定期的に、血液検査、脳波検査を受けることはうれしくはなかったけ

ど、だんだん慣れてきました。早く治りたいなど思いました。

「てんかん」自体は、発作が長く続かない限り、命に別状はなく、普段通りの生活をしていいそうです。もし周りで発作を起こす人がいたら、できるだけ冷静に落ち着いて対応することが大切だと思います。ぼくは、周りの人が普通に接してくれてうれしかったです。

ぼくにもできるボランティア

赤穂西小学校六年 山下 龍一郎

ぼくの妹がヘアドネーションをしました。それを見て、ぼくも何かだれかの役に立てることをしたいと思いました。ヘアドネーションは小児がんや脱毛症、不慮の事故などで頭髪を失った人たちに、寄付された頭髪でウィッグを作ったり、無償で提供する活動のことです。髪が無いのはやっぱりつらいと思うので、寄

付した髪で作ったウィッグをつけて、幸せになつてくれる人がいるんだつたら、とても良いことだと思いません。だけど、ぼくは男で、髪をのばすのはちょっと無理かもしれません。だからぼくは、小学生でも気軽に参加できるボランティア活動は、どのようなものがあるのか調べました。それは、主に3つです。一つ目は寄付、二つ目は収集、三つ目は募金です。

まずは寄付についてです。

もう使わなくなった服や教科書、本などを被災地へ支援物資として送るといふ活動があります。ただ気を付けないといけないこともあります。もう着なくなった服で汚れや、やぶれたりしている所があると不可なこともあります。支援物資は個人単位で送らず、ボランティアや募集团体を通じて募集されている物だけを送ります。

二つ目は収集についてです。

使用済みの切手やプリペイドカードやペットボトルのキャップなどを募集しているところがあります。それらの募集している物を集めてボランティア団体に送ることが収集です。この活動は小学校やほ

くがしている習い事でも行っています。

三つ目は募金についてです。

災害支援や年末助け合いや赤い羽根共同募金の種類があります。募金方法は街頭募金や店頭のほか、紙面や銀行振り込みやインターネット振り込みなど、たくさんの募金方法があります。これからはほくもだれかの役に立てるように積極的にこのような活動に参加していきたいと思えます。

最後に福祉とは支援する側が支援してもらう側の気持ちを考えていけなないことも知りました。

毎年自然災害などで多くの方が避難生活を余儀なくされています。突然、必要な物が無くなり困っている姿をテレビで見ますが何でも送ればいいというわけではありません。被災地へは、いつものように物資を届ける事ができないので、賞味期限が近い物は困るそうです。送る側、もらう側、どちらの気持ちも大切なので、せっかくの善意を気持ち良く受け取ってもらえるように今、何を必要としているかを調べてから送り、お互いが幸せになるのが福祉だとぼくは思いました。

ホーリーとコト

尾崎小学校六年 小川 桔平

ぼくが、小さいころ以前に住んでいた、家のとなりに、おじいさんと、おばあさんが住んでいました。おばあさんは、すぐに亡くなり、おじいさんは、独り暮らしとなりました。

ぼくと姉は、そのおじいさんに、とてもやさしく可愛いがってもらいました。

ぼくたちは、そのおじいさんのことを「ホーリー」と呼んでいました。

名字が、「堀」さんだったからです。

「ホーリー」は、目と目が合えば、ニコツと笑い、「きつちゃん」とよんでくれました。

ぼくには、おじいさん一人とおばあさん二人がいますが、一緒に、住んでいなかったのです、本当のおじいさんのようでした。

おもちゃやお菓子をいつも持ってきてくれました。

自動車にのってたけど、年がいきすぎて、危ないので、乗らなくなりました。

それで、ぼくらの運動会には、タクシーで来てくれたのには、みんなでびっくりしました。

一人で買い物したり、料理をしたりしていました。

ぼくのお母さんは、サラダやあげ物を作ったら、「ホーリー」に持って行ってあげていました。

ぼくらが飼っていた犬の「でんすけ」も、とても可愛がってくれました。

ぼくの一番の思い出は、「ホーリー」にしようぎを教えてもらったことです。

王手のとり方を教えてくれて、お父さんに勝つても、うれしかったことを思い出します。

今でも、感謝しています。

でも、こんな楽しいことは、続きませんでした。ある夜、「ホーリー」の息子さんが、訪ねてこられました。

「ホーリーを東京に連れて行きます。」

「長い間、お世話になりました。」

この事を、お母さんから聞いてぼくは、ショック

でした。さびしい気持ちで、一杯でした。

「ホーリー」は、東京の施設に入るそうです。

「ホーリー」のことは、いなくなっても、忘れることはありませんでした。

家族もみんな同じ気持ちでした。

一年ほどたった夏休みに、お父さんが「ホーリーに会いに行こう。」と言ってくれました。

車で、8時間かかって、行きました。

夜じゆう走って朝に、つきました。

「ホーリー」は、笑顔で施設の玄関で待っていてくれました。姉は、ずーっと泣いていました。ぼくも、会えてすごくうれしくて泣いてしまいました。

「ホーリー」は「元気だよ」と話してくれました。

ぼくは、「ホーリー」と、そこで思い出のしょうぎをしました。

ぼくが、ぼろ負けしました。

この時、「ホーリー」は、まだまだ元気や」と安心して帰りました。

それなのに、すぐそのあと、「ホーリー」が亡くなったという知らせがありました。

「うそーっ」と思って大泣きました。

家族みんなで、泣きました。

今までの思い出は、絶対忘れません。

本当にありがとう。

ぼくらの家となりで、いてほしかったな。

なぜ、東京にいかなくあかんかったんやろう。

でも、最後に会いに行つてよかった。

「ホーリー」、天国でいつまでも、ぼくらを見守ってください。

ぼくじゆうきるいじ

御崎小学校六年 中野 創介

ぼくは、五年生の時に、福祉体験学習をしました。その中で、高齢者疑似体験とキャップハンディの体験をしました。

「高齢者ってこんなに大変なんやなあ。」「段差がこわい。」「耳が聞こえない人は、手話で人と話しを

するんだ」と、とてもきちょうな体験をしました。障がい者や高齢者を知るきっかけになりました。

そして自分たちにできることは、どんなことだろうと考えるいい機会を得ました。

その人の気持ちになったり、その人たちにどのように声をかけましたらいいのか考えました。

でもなかなか、そういう場面に出会わないし、本当に出会ったとしたら、やっぱり心のどこかにどうしようと思ってしまう、迷ってしまいそうです。

そんなとき、乙武洋匡さんの「五体不満足」の内容を聞きました。

乙武さんは、いつもニコニコして明るく笑っています。

「先天性四肢切断」で、生まれつき手と足がないという、障がいをもって生まれてきました。

まず、小学校の先生がすごいです。かわいそうだから、なんでもしてあげるんじゃない、本当にその人のためになることを考えて、ときにはきびしくします。

とくに心に残ったのは、遠足の山登りです。大変

だから、乙武くんは休んだほうがいいかと先生がクラスみんなに聞くと、「オトちゃんだけ休むなんてズルイよ。」と言いました。そしてみんなで車いすをおしたり、引っぱったりしながら山を登りきりました。乙武さんのクラスみんなは、障がい者は、かわいそうだから、いっしょに遊んであげようという気持ちじゃなくて、クラスの仲間だから、どうやってらいつしよに遊べるかを、ふつうに考えていたのだと思います。

乙武さんは、障がい者は、特別な人たちでも、かわいそうな人でもないと言います。

もうすぐ、パラリンピックが始まります。

障がい者が行う大会です。ぼくは、オリンピックもすごいと思うけれど、パラリンピックは、手や足に障がいのある人はそれ以外の全身を使って本気で戦っている姿を見ると、障がいというのがどこにあるんだろうと思うくらい強さや迫力があります。パラリンピックにちょう戦する人はすごいです。パラリンピックを応援し、感動したいと思います。

もし、自分が障がい者だったら、こんな前向きに

障がい者スポーツと向き合えるだろうか。ぼくは、きつと積極的に行動せず、おとなしくしていると思う。

そんな考えをもつぼくと変わって、ぼくの知る障がい者の方は、明るくて、積極的に活力があります。それでも、最初は明るかったとは限りません。そうとう苦勞をしたと思います。それを乗りこえてきたのだから、努力すればだれもが大きなかべは、乗りこえられるのだなと思いました。大変なことだからだったにちがいありません。でも、くじけそうになったり、大変なことを乗りこえれば、明るい未来が必ず来るんだと祖母がよく、ぼくに話してくれます。ぼくは、小さなことでもいいから、障がいの人の力になれるといいなと思います。でもぼくが手を出したとしても、逆に相手はこまってしまうのではないかと思いました。そしたら何ができるのだろうかと考えました。

一つは気をつかうのではなく、みんなと同じように接することではないかと思いました。

変に気をつかうと障がい者の人も気持ちがあまリよくないはずです。だから、いつそのことふつう

に接することです。そうすれば障がい者の人も気持ちがいいと思います。

二つ目は、笑顔でいること。もし障がいでもまっている人がいたら、笑顔で接しようと思います。面どうくさいという顔をしながら相手を助けるのと笑顔で助けるのとは、全然気持ちはちがいます。受けるがわの人も気持ちがいいと思います。

もしもこまっている人を見かけたら「ぼくに何かできることはありますか？」と一言かける勇気を持ちたいと思います。

「わたし」じゃなくて「わたしたち」

坂越小学校四年 村 上 ひなた

わたしは、学校で車イス体けんが高れい者体けんをしました。体けんをする前は、車イスの方と高れい者の方は、わたしみたいに楽しい毎日を送っているのではなくて、辛い毎日を送っていると思ってい

ました。

わたしは今まで車イスに乗っている方は、一人では生活ができないと勝手に決めつけていました。けれども、車イス体けんをさせてもらうと、わたしの考えはちがうと分かりました。たしかに一人で生活ができない方はいますが、一人で生活している方もいます。さらには、車の運転をする人もいます。わたしは、ここでぎ問をいただきました。「足でアクセルなどがふめないのに、どうやって車を運転するのだろうか。」と思いました。すると、車イスに乗っている方は「手がとどくところにアクセルやブレーキがあるんだよ。」と教えてくれました。わたしは、「車イスの方のことを考えて車の開発されていてすごいな。」と思いました。

車イス体けんを通して、たくさんのことが分かったけど、特にわたしがすごいと思ったことは、車イスに乗っていても、ゆめはかなえられるということ。車イス体けんの時に来てくださった方は、東京パラリンピックに出てみたいと言っていました。その方は、りく上用とソフトボール用の車イスを

持っていました。車イスの中でも、いろいろなしゅ類が開発されています。そして、その方は、りく上などの競ぎに出たいと言っていました。そのために、毎日ど力してがんばっているそうなので、わたしはそのゆめをあきらめず、がんばってほしいなと思います。東京パラリンピックがもうすぐ始まりますが、車イスだけでなく、ぎ足をつけて走る人や目が見えない人もいろんなスポーツで試合をするので、見るのをとても楽しみにしています。

次に、わたしは高れい者体けんをしました。最初は、あまり大変じゃなさそうだと少し思っていました。けれども、体けんをしてみると、大変なことが多いということが分かったのです。目も見えにくく、手に物を持つとうとしても、すぐすべったり、足も思うように動かなかつたりします。そのままでは給食を食べると、とてもしんどかったです。おはしも使にくく、スプーンを使って食べました。もつと辛かったのは、かいだんでした。かいだんは手すりがないから、とてもこわいです。なのでわたしは、高れい者は毎日辛いんだなと感じました。

体けんがとても辛かったので、わたしは高れい者には、楽しみがあるのか気になりました。そのことを考えていると、おばあちゃんがわたしたちに会うと、いつもここにしているのが思いうかびました。わたしは、高れい者にも、子どもたちに会えることやお出かけができることなど、たくさんの楽しみがあるということが分かりました。なので、次におばあちゃんの家に行くときは、もっといろいろなことを話してあげようと思いました。きっと、おばあちゃんにはえ顔でよろこんでくれると思います。

このような体けんをして分かったことは、車イスに乗っている方や高れい者の方は、辛いこともあるけど、わたしみたいに楽しい毎日を送っているという事です。わたしは今まで車イスに乗っている方や高れい者の方を「かわいそうだな」と思っていました。けれど、体けんをして考えが変わりました。わたしにもできないことや大変なことがあります。そんな時は家族や友達が助けてくれます。だから、これからは、車イスに乗っていることや年れいで決めるんじゃないくて、こまっている人には「大じょうぶで

すか」と声をかけたいです。そうすれば、みんなが幸せにすごすことができる社会になると思います。

高齢者を大切に

高雄小学校六年 廣瀬 仁紀

ぼくの家には八十七歳のおばあちゃんがいま。おばあちゃんは最近耳が遠くなってきて何回も「は？何て言うたんかな？もう一回言うて」と聞いてきます。大きな声でゆっくりと言ってあげると聞こえるみたいだけれど、毎回これが続くとぼくは「じゃまくさいなあ。」と思ってしまう。

それにおばあちゃんは、六年前位に軽度の認知症だと病院で言われました。早くに分かったし、薬を飲んでいたので進行はおそいけれど、色々大変な事もあります。昔の事はよく覚えていて、ぼくよりも何でも知っていて教えてくれるけれど、ついさっきの事を忘れてしまいます。何回も同じ事を

言ったり、さつき言った事を覚えていなかったり、物をどこにしまったのかを忘れてしまったり、電話がかかってきた事や内容も忘れてしまいます。ぼくが何年生か何回言っても次の日には忘れていて、「よしき君は何年生になったんかな?」「六年生やで」「へえー、もう六年生か、最高学年頑張らなあかな」と、この会話はもう何十回もしています。正直またやと思ったり、急いでいる時はムツとして冷たくしてしまいます。

でもお母さんは、おばあちゃんが何回同じ事を言っても、初めてのようにおばあちゃんの話聞いてあげています。大事なことは忘れないように大きめの紙にメモを書いてその日に渡しています。ぼくだったら前にも聞いたし、何ですぐに忘れてしまうのかと言ってしまうんですけど、それを言ったら認知症の人は不安になってしまおうとお母さんは言っていました。自分がいろんな事を忘れていつている事に不安を感じて人と会う事をさけてしまったり、閉じこもったりして症状が悪化することもあるそうです。自分が自分じゃなくなってしまうことに不安を

感じているそうです。だから周りにいる家族が上手に接してあげる事がとても大切だと教えてくれました。

ぼくは今まで自分がおばあちゃんに面倒くさい態度をとっていた事を反省しました。おばあちゃんだって認知症の自分と戦っているんだと分かりました。おばあちゃんの机の上には、自分でいろんな事をメモした紙が大量にあります。それは少しでも自分が忘れてみんなに迷惑をかけないようにと、おばあちゃんも頑張っている証拠だと思いました。

日本は少子高齢化だとニュースで聞いたことがあります。今よりもっと高齢者が増えていくので、高齢者が住みやすい社会を今よりもっと作り出さなければダメだと思います。ぼくのおばあちゃんには免許を返還しているので、買い物とか必要な物はお母さんが買ってきています。一人暮らしの高齢者も増えていくから、車の運転が出来なくても欲しい物を買えるように高齢者専用のバスを運行したり、人とふれ合う機会を多く作れるように移動販売車を増やしてあげるのもいいなと思います。老人

ホームやデイサービス、介護施設ももっと必要になるだろうし、高齢者が気軽にためらいなく利用できる工夫も必要だと思います。ぼくのおばあちゃんは、そういう所はお年寄りが行くところやと言って、デイサービスも何も利用していません。昔からの偏見があるのだろうとお母さんは言っていました。家族が今はそんな事ないと、説明してもなかなか納得しません。老人とか高齢者という言葉を使わずにネーミングするのもいいと思うし、もっとどんな事をしているのか、どんなところなのかを高齢者自らが知られる方法も考えていったらいいと思います。

ぼくは、世界でも日本はお年寄りに優しい住みやすい国だと思えます。でもこれからももっと上を目指して高齢者が住みやすい国ナンバーワンになって欲しいと思います。



安心してくらせるかんきょう

有年小学校五年 井上実玲

わたしは、今まで学校でたくさん福祉体験をしてきました。学校でどのような体験をしたかという
と、一、二年生のころには「手話体験」、三年生では「視覚体験」、四年生では「点字体験」と、全校でパ
ラリンピックススポーツの「ボッチャ」をしました。
それぞれの体験の中で、そのしょうがいをもった
人が来てくれました。たくさん話を聞いているだ
けでも、その人がどれだけたくさん苦労をしてい
たのかがよく伝わってきました。例えば、一、二年
生の時にした「手話体験」は文字の表し方を教えて
もらいました。自分の名前をしっかりと覚えるだけ
でもとても大変だったのに、それをさらに文章とし
て表すことは、
「どれだけ、大変なことなんだろう。」
と、思いました。

そして今年は、パラリンピックがあります。パラリンピックとは、しょうがい者を対象とした、「もう一つのオリンピック」です。パラリンピックの競技の中には、わたしたちも体験した「ボッチャ」もあります。ボッチャは体が不自由な人がしている競技です。ボッチャだけでなくパラリンピックには、体が不自由な人がする競技がたくさんあります。その中の一つで「車いすバスケットボール」があります。車いすバスケットボールは、車いすに乗ってバスケットをします。テレビで初めて見た時に、どの選手も車いすを上手にそう作しながらドリブルをしたり、シュートを打ったりするすがたが一番印象に残りました。でも時どき車いす同士がぶつかって、転とうするシーンもありました。「こわくないのかな。」と思ったけど、みんな一生けん命に試合をしていました。わたしは前に福祉体験で一度だけ車いすに乗ったことがあります。でも視線は低くなるし、不安定になる時もあるので、選手たちはやっぱりすごいなと思いました。わたしは福祉体験でボッチャをして、そのむずかしさがよく分かりました。よく

ねらっていてもボールがその場所に行ってくれなかったり、きよりがとどかなかったりしました。少しだけのずれでも目的の場所に行かないとてもむずかしい競技です。しょうがいがあってもこれだけむずかしい競技ができるのは本当にすごいと思いました。そしてパラリンピックのスポーツには、体のしょうがいだけでなく、見ためでは分からないしょうがいの人がいるんだと知りました。

最後にわたしは、「福祉」という言葉を辞書で調べてみました。辞書には、「人々が安心してくらせるかんきょう。」と書いてありました。わたしが思う人々が安心してくらせるかんきょうは、困っている人がいたら助け合えることや、世界で戦争が無くなることだと思いました。わたしの身のまわりで困っている人とは例えば、足をけがして歩くのが大変そうにしている人や、学校での勉強が分からないところがある人だと思いました。学校など知っている人なら声をかけられるかなと思います。でも町などで知らない人が困っていたら、はずかしかったりして、助けたい気持ちもあるけど、本当は困ってい

なかつたりしたらどうしようという気持ちもあつて、声をかけられないかなと思いました。でもそれができるようになるように、知っている人から少しずつでも自分から話をしていけるようにならないといけないんだと思いました。そして、人々が安心してくらせるかんきょうに近づけていきたいです。

「コロナ差別」で考えたこと

原小学校六年 藤原 蒼 真

ぼくは、最近、テレビなどで、「コロナ差別」について気になりました。ぼくは、どうして差別がおきるのかなどを考えてみました。

ぼくは、まず、どんな差別があるかを調べてみました。すると、学生の感染が確認された大学の事務室に、「火をつけてやる」や、「殺してやる」などのきょうはく状がとどいたり、感染した大学を名指しで「〇〇大生入店おことわり」とひとくくりになされ

たり、配送業者の子どもは、仕事から親がウイルスをもっているかもしれないので「学校にこないでほしい」「感染者の多い県のナンバーの方は一切、このし設のご利用をおひかえください」などがありました。また、感染した人の家のまどガラスをわられるということもあつたので、そこまでしてまでどうして差別をするのだろうと思つたので、ぼくは次になぜ差別がおきるのかを考えてみました。たぶんぼくは、自分の思いこみや、ウイルスがこわかつたり、感染したくないという思いや、自しゆく中のストレスの発散などで、ウイルスに感染した人をきずつけているんだと思ひました。また、差別をしようと思つてしゃべつていなくても、感染者からは、その言葉が差別だと感じてしまうこともあるんじゃないかなと思ひました。そして、ぼくは、差別をうけている人の気持ちを考えてみました。差別をうけた人は、ウイルスの症状よりも差別がおそろしかつたり、ウイルスで体、差別で心が苦しい思ひをしています。医りよう関係者は防護服やマスク、消毒など、感染対策をしながらちりようをして、人のために働いて

いるのに差別をうけてつらい思いをしているそうです。ぼくは、どうしたら差別がなくなるのかと思って、考えてみました。一つ目は、差別をしている人が自分のしていることを自分がされてどういう気持ちになるかを考えてもらうということです。自分と相手のことを考えれば、きっと、差別がなくなるんじゃないかと思つたからです。二つ目は、自分の思いこみでまちがつた情報や、ウワサを流さないために、正しい情報を知ることがとても大切だと思ひました。三つ目は、どういったことが差別にあたるのか、どうして差別につながってしまうのかを考えることもすごく重要だと思ひました。ぼくは、差別をなくしたり、減らしたりするには、やっぱり、自分が相手の気持ちなどを考えてしゃべったりしなければならぬんだと思ひました。

ぼくは、この新型コロナウイルスの差別から、これから自分はどうすればいいかを考えてみました。まず、自分たちへのコロナウイルスの感染を防ぐために必要な方法を身に付けることが大切だと思ひます。また、差別をうけている人と医りよう関係者の

人へのおうえんや、しっかり他人のことを考えてから、しゃべったりして、差別をなくしたり、減らしたりすることや、差別をうけている人の相談相手になつてあげたりすることも必要なんじゃないかなと思ひました。だからぼくは、自分の身の周りで差別や、差別をしている人を見つけたら、注意をして、少しでも差別を減らそうと思ひました。



中学生の部 大賞

笑顔溢れる町に

赤穂西中学校一年 萩原明依

「何これ、楽しい。」

これは、私がボッチャをした時の感想です。みなさんは、ボッチャというスポーツを知っていますか。ボッチャとは、目標とするボールに、誰が一番自分のボールを近づけられるかを競い合うスポーツです。この競技は、パラリンピックで行われる競技の一つで、「地上のカーリング」とも呼ばれています。パラリンピックには、様々な競技があります。しかし、その多くは車いすテニスやブラインドサッカー、陸上など、もともとあったスポーツを、障がいのある人でも楽しめるように考えられたスポーツです。それに対してボッチャは、運動能力に障がいがある競技者向けに発案された障がい者ス

ポーツの一つです。私は、年下のいとこと、このスポーツをしました。幼いところでも、一緒に楽しむことができました。つまり、ボッチャは、誰もが楽しめるスポーツと言えるのです。

パラリンピックを開催する前の環境を整えるために、令和三年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会特別措置法が制定されました。この法律で、交通機能の向上など、施設や設備の整備が行われたそうです。障がいのある人が移動しやすくなるということは、高齢者の人や小さな子供など、すべての人が安心して生活できるということ。少しずつは、環境が整ってきていますが、全国的に見ると、まだまだ安心できる町にはなっていないところがあります。そこで、誰もができるボッチャの競技のような視点をもとに、みんなが暮らしやすい町について考えてみることにしました。

障がい者や高齢者にとつての一番の課題は移動です。私の曾祖母も高齢のため、車いすで移動することが多くなりました。少しの段差でも、車いすが通りにくいことがあります。時間がかかってしまいます。

車いすの人は、急な坂を上ることができなかつたり、少しの段差があると通れなかつたりと、困ることがたくさんあります。また、視覚障がい者の人は、信号の色が分からない、段差に気づけない、自転車に乗っている人や歩行者がいても分からない、などの問題点があります。聴覚障がい者の人では、後ろから自動車や自転車などが来ていても分からず、とても危険です。そして、曾祖母のように、高齢者の人は、段差でつまずいてしまつたり、階段を上ることができず、行きたいところへ行けなかつたり、車を運転することができなくなつたり、自分の思うように行動できなくなつてしまいます。このように、それぞれの問題点を洗い出すと分かるように、障がいによつて課題も違います。例えば、視覚障がい者にとっては必要な点字ブロックでも、車いすの人にとっては、一つの障がい物（バリア）となつてしまします。では、だれもが暮らしやすい町にするためにはどのような工夫をしなければならぬのでしょうか。私が考えた課題の解決策は二つあります。

まず一つ目は、更なるバリアフリー化です。町中

の人通りが多い道路では、信号に音声案内や、延長ボタンがついていたり、点字ブロックがあつたりします。また、駅や図書館などの公共施設や、大型ショッピングセンターには、エレベーターやエスカレーターが設置されていたり、階段だけではなく、スロープがついていたりするなど、整備が進んでいます。しかし、人通りの少ない道路などでは、まだまだ進んでいないところも多くあります。私がみんなのために増えたらいいと思うものは、駅のホームにある転落防止柵や、自転車専用道路です。転落防止柵は、電車に乗り降りする時だけ開くので、安全です。自転車専用道路があると、歩行者や、車いすの人が安心して移動することができます。

二つ目は、交通手段の拡充です。通勤、通院、買い物に行くことがスムーズにできれば、生活はかなり充実すると思います。そのために、高齢者にタクシーチケットを配布したり、巡回バスや移動スローパーを増やしたりすると、みんなが移動しやすい町になると思います。どちらも費用のかかることなので、すぐにできることではないと思いますが、少し

ずつ進んでいってほしいです。

このような町づくりを進めていくことは、とても大切です。しかし、一番大切なのは、私たちの心だと思えます。いくら環境を整えていても、互いに認め合い、助け合うことができなければ、本当に暮らしやすい町にはなりません。パラリンピックの価値は、「勇気・強い意志・インスピレーション・公平」の四つの力だそうです。私も、相手の立場になって物事を考えようと努力したり、自分にできることを見つけて、実践したりしていきたいです。笑顔溢れる町を目指して。



中学生の部 特選

男女平等とジェンダーレス

赤穂東中学校三年 濱川 志桜

「ジェンダーレス」という言葉を知っていますか。ジェンダーレスとは「性別の差がないまたは、なくそうとする考え方」のことです。

では、なぜ性別による差別は起こるのでしょうか。理由として「教育の欠如」「生物学的役割の違い」などが挙げられます。教科書を一通り見てみましたが、確かにジェンダーレスに関するものは載っていませんでした。同級生の子にジェンダーレスの話をした際、「そんなものがあるのか」と驚いた顔をしていました。私はこの時ジェンダーレスに関する教育が進んでいないことを身を持って感じました。「生物学的役割の違い」は、妊娠するのは女性であるというような性別で決まっているものことです。こ

のようなことから差別は進んでいったのでしよう。

今、日本ではジェンダーレスに対する取り組みが行われています。例として挙げられるのが「ジェンダーレス制服」です。女子はスカートにリボン、男子はズボンにネクタイという決まりをなくし、自由に組み合わせが出来るようにしたものです。変更した人は少ないようですが、こうした選択肢があることは大切だと思います。他にも「化粧品」でも取り組みが行われています。男性用と女性用では肌質の違いに合わせて作られているので大きく差があり、男性用は女性用よりも種類が少ないという違いがあります。そこで、男女兼用の化粧品が販売されています。白や黒などの誰でも使いやすい形、誰でも持ちやすい形になっているそうです。

こうしてみると、ジェンダーレスに対する取り組みは進んでいるように思えます。ですが、日本で取り組みが進められるようになったのは最近です。「ジェンダー・ギャップ指数」というどれほど男女格差があるのかをランキングにしたものがあります。日本は百四十四ヶ国中百二十一位と世界的に見

ても低いことが言えます。

現に、性別による差別は身近にあります。「女の子なんだからこうしなさい」という言葉。よく聞くと思えます。実際に、私自身言われたこともありま。す。「男子は車や戦隊モノが好き」「女子は人形遊びやおままごとが好き」という考え方もおかしいと思います。性別によつて好きなものが決められる訳ではありません。先入観からこの考え方は出来ていません。お店のポップでも「男の子」「女の子」と分けられている様子をよく見ます。身近なものだと、テスタの時に名前を書く欄の横にある男・女に丸をつける所。他にも、出席簿が挙げられます。私の学校の出席簿は男子が先、女子が後に表記されています。では、どうすれば性別による差別は無くなるのでしょうか。ジェンダーレスに関する取り組みは増えていますが、それだけでは足りません。最も必要なのは「多様性のある考え方」だと思います。どれだけ取り組みが増え、生活に馴染んだとしても「女子は、男子は、こうあるべきではないか」という考え方を持っているのと、周りとは少し違う人をおかしな人

中学生の部 入選

「人にやさしい社会」への指針

赤穂西中学校二年 三 谷 春 翔

と認識してしまいます。まずは「こうあるべき」という先入観を無くすことが差別を無くす第一歩です。私はジェンダーレスについて少し知っている程度で、今回調べてみることで詳しく知りましたが、身近に性別による差別がたくさんあり、驚きました。同時に私も男女を差別するような言動をしていたことに気づけました。自分の言動を改めて振り返ってみて下さい。差別のきっかけになるものはたくさんあります。

私は、性別に対する取り組みが広がって、男女平等が「すごいこと」ではなく「当たり前のこと」になる社会になってほしいと思っています。多くの人が自分らしく過ごせる社会を作るために、私たちに出来ることはすぐそばにあります。あなたは、どうしていききたいですか。

二〇二〇年、日本における児童の出生数は、八六万五二九人となった。そんな中、二〇一八年の児童虐待の件数は、一五万九八五〇件となっています。また、虐待死による一年間の事例は年間五〇件を超え、一週間に一人の子供が命を落としている、という状況にあります。

まず、児童虐待は何故起こってしまうのでしょうか。親による虐待は本当に親だけが悪いのでしょうか。僕達のように子育てをしない人が見たら勿論、親が悪いようにしか見えません。「そうするんだったら、子供を産むなよ。」と考えます。ですが、親の立場からすると、今の自分からすると計り知れない程のストレス、孤独感、欲求、疲労、嫌悪感など

様々な感情があるということが分かっています。ですが、一番怖いのはやはり「完璧志向性」ではないのでしょうか。「良い子供にしたい」という思いが強くなれば強くなるほど、子供が間違えた行動に腹が立ち、腹が立ち、となると同時に子供への拒否感が生まれ、また腹が立ち、拒否感が更に増します。そこで一度ビンタをしたりして、それが次第に悪化していくことで、児童虐待が起こります。

では、児童虐待を防ぐ方法はあるのでしょうか。それは人によって全く違います。まず、親にできることは一つです。我慢ではなく、相談です。「子育て仲間」や、「妊娠SOS」などを使い、ストレスも不安も抱え込まないようにすることです。では、私達個人にできることは何でしょうか。やはり、まずは「虐待」について正しく知ることです。どの程度の行為が虐待となるのか、どの番号で通報するのかなどを知る必要があります。虐待とはどのようなものでしょうか。

虐待には、四つの種類があります。「身体的虐待」、「性的虐待」、「心理的虐待」、「ネグレクト」です。「身

体的虐待」は、主に殴る、蹴るなどの暴力で、周囲からは分かりやすく顕在化しやすいものです。「性的虐待」は、子供への性交や、行為の強要や教唆といったものです。「心理的虐待」は、大声や脅しで恐怖に陥れたり、著しくきょうだい差別をしたりするもので、子供がDVを目撃してしまうような自尊心を傷つけるようなことを指します。「ネグレクト」は、保護の怠慢、養育の放棄、拒否などを指し、最悪、死につながる恐れもあります。それが分かっているにも通報しにくい。なぜなら、虐待か？しつけかが分からないから。私達に必要とされるのは、その状況での「勇気」です。躊躇せず、勇気をもって通報、相談することが私達にできることの一つです。

もう一つ、私達にできることは、「子育て中の親に優しく」もその一つです。ベビーカーの持ち運びを手伝うことや、知り合いの子供の面倒を見てあげたりして、互いの心が少し穏やかになることをする。それが私達にできる最大の援助です。

少子化がどんどん進んでいくこの世の中で、子供の命が更に更に大事になっていきます。辛い事も、

悲しい事も、楽しい事も、嬉しい事も、大人も子供も関係なく助けあっていけたら、きっと、「人にやさしい社会」につながり、その行動が、私達の目指す社会への指針になる、と思いました。

世界に一つだけの花

坂越中学校二年 寺 下 空 輝

僕の兄はダウン症という障がいを持っています。一般的にダウン症とは、いちじるしい筋緊張低下、全身の循環不全、ずんぐりした体形、顔面の中央があまりよく組織としてつくられていません。動きが乏しい、骨もなかなか丈夫な構造にならない、黄疸が強めに出やすい（新生児期）、数々の合併症がみつかる、言語および運動発達が遅れ気味である（乳幼児期）、文字学習や抽象概念の操作が苦手にみえる、内向性が強まる、早くから老化の兆しがみられる、一部に肥満や気道閉塞の症状がみられ、外観的

に老化のような変化がある、一部に急速な知能低下やテンカン発作の現象が起こる等と言われている。なので生まれてきた時に、悲しまれたり、歓迎されたりしない。同じ人間として生まれてもこの時に大きな差別を受けるように思う。

でも僕は兄のことをそんな風に思ったことはありません。ふだんの生活でも、ちゃんとした会話はできませんが長年一緒にいると、なんとなくですが分かります。また、僕が野球の自主練をするときは、羽根を投げてくれたり、ボールつぎをしたりなど、いろいろしてくれるのでとても助かっているし、筋トレやランニングは一緒にやっているのでダイエット効果がバツグンです。なのであまり僕と兄の間にある障がいという壁はなく、ふつうの人と何も変わらないような感じでした。こういうことが思える人が増えてきたらいいなと思います。

また僕は兄を尊敬しています。中学一年生の時に文化祭の有志ステージに一人でステージに出て、何百人という人の前でダンスをしたことについては、とてもすごいなと思いました。僕にもとても

できやしないことがあっさりできてしまう所が兄のすごい所です。

また、お手伝いしてと言われたら最初はぐずぐず言いますが、結局はムスムスしながらしますが、皿をふいて終わるのではなくちゃんと食器棚まで入れています。位置なども全て合っているのでよく見ているんだなと思います。

また兄はとても幸せ者だなと思います。非常に恵まれた環境で中学生を送っていました。同じ学校に通っていて、関わる人、サポート、支援により、兄が幸せな毎日をすごしてきたのを目のあたりにしてきました。そこで次は僕が、兄がたくさんの人にサポートしてもらった分、僕も兄と同じ障がいを持った人が困っていたらサポートしていききたいです。また、サポートなどいいことをしたら、その人との壁もなくなり、よりたくさんの人とコミュニケーションができたりなどができると思います。

最後に僕はこれから、どんな人も大切にし、誰もが輝けるように、世界中が平和にHAPPYになつてほしいです。

中学生の部 佳作

支える人の大切さ

赤穂中学校二年 本林春乃

私は貧富の差、生活面での差別による問題について書くことにしました。きっかけは、二十四時間テレビのドラマ「生徒が人生をやり直せる学校」を見て、世の中には生活面で困っている人、誰にも辛い事を打ち明けずに自分を限界に追い込んでしまう人がたくさんいると知り、「支えてくれる人」という大切な存在に気づけたからです。母子・父子家庭やお金に困っている家庭は多いと知って、今私が過ごしている日常は当たり前ではないと思いました。

ドラマの内容は生活、お金、将来の事などで自分を追いつめてしまい悩む高校生達と、それを見守りながらも支えてくれる生徒思いな先生達との実話でした。

ドラマを見ていて驚いた事がありました。それは、バイトや就職が学校名を聞いただけでできなくなる場合があるということです。「迷惑になっているあの学校でしょ。」「うちの店の評判が悪くなるかもしれない。」という決めつけにより、傷つけられる人がいると知りました。家庭を支えようとしている事が返って傷つくことになる時もあるので、改めて判断の大切さを感じました。

生活が苦しいというのは子供は何も悪くないし、だからといって頑張って働いてくれているから親が悪い訳でもありません。しかし、親が働けるのに働かなかったり、病気だったりする家庭もあり、子供がなんとかバイトをしないといけないこともあります。このような子供への負担や貧富の差が原因で、少し荒れることや不登校になることがあると分かりました。差をなくし、みんなが安心して楽しい生活を送れるように社会の支えが、今以上に必要になってくると思います。また、今ではコロナ禍で働く場所を失い、生活に困る人が増えてきています。このような時こそ周りの人達と支え合ったり、政府から

の資金や働ける場所の提供だったりが大変になると考えました。ただ働けるだけでなく、働きやすい環境作りも大事だと思います。こういった誰かを支える大切さを考えていると、私も支えてもらった経験がたくさんあるなと思います。

最近の事でいうと中二になったばかりの頃です。クラスが変わり、友達関係がうまくいかず心がモヤモヤしていました。悩んでいたけど誰にも相談できなかったことをよく覚えています。誰にも話せなかった結果、自分を追いつめ「学校」という場所が私にとって窮屈な場所となりつつありました。そんな時、担任の先生が気づいて相談にのってくれました。その時は誰かに打ち明けられたことがとてもうれしいのと辛さがよみがえってきて、これまでの思いがあふれました。話すときが軽くなり、気がだいぶ楽になりました。この出来事で私は「頼る」ということを学びました。

「頼りなさい。」と、先生のその一言で「もっと人に頼っていいんだ」と思うことができ、いつでも相談し、自分をコントロールできるようになりました。

ドラマや私の経験から人は頼るといふことを覚え、支えてもらうことで一步成長できると考えました。だから、いつでも誰にでも頼ったらい、支えてもらったらいいと思えました。そしたらきつと自分に自信がもて、素直になることができるんだと思います。

二十四時間テレビのドラマや普段の私の生活から、私も誰かを支えられる人になりたいと思いました。頼らせてもらった、支えてもらった分は今度は私が頼ってもらう、支えられる立場になりたいです。学校の先生という生徒を一番に考え、行動できる職業に少し尊敬や憧れという気持ちを持ちました。

人はみんな問題を抱え込み、追いつめられることも多いと思います。しかし、生きていく中で出会う自分を支えてくれる人達を大事にし、支えてもらった人がまた誰かを支えるというのを繰り返すと「支える輪」ができて優しい世界が広がっていくと思えました。

まずは身近な友達を支えてあげられるように、しんどそうな時は声をかけてあげ、話を聞いてほしそ

うなら、側で真剣に向き合えるようにするところから頑張ろうと思えました。

貧富の差、生活面での差別は急になくなるものはありません。だからといって生活に困っている人はたくさんいるので減ることもありません。しかし、その人達の心を支えられる人が増えることで生きる希望や前向きに考えを持つて「幸せ」と感じる瞬間を増やしていけるのではないのでしょうか。

心が落ちつく日常に

赤穂西中学校二年 井出 乃愛

去年、私のおじいちゃんが亡くなりました。新型コロナウイルスの影響で緊急事態宣言が出され、一回目が解除になってすぐでした。長かった休みが終わり、学校が始まって少し日常が戻ってくるのかなと思っていた時、おじいちゃんの体調があまり良くないと聞きました。

毎日、家で過ごすことが多くテレビで見るニュースはコロナウイルス関係の事ばかりで身近にあるようでよく分からない気持ちでした。テレビでは感染した人数や病院での受け入れが難しい事、医者や看護師が防護服のようなものを着て仕事されている様子が繰り返し返しのよう流れていました。

私のおじいちゃんは、コロナウイルスという病気が流行する少し前から入院していました。時間があ
る時には、お母さんとよくお見舞に行つて話をしたり会いたい時に会えていましたが、急に面会ができなくなりました。目にしたことがある人も多いと思います
ますが、病院には大きく「面会禁止」と貼り紙がして
います。初めは、家族一人のみ面会可能だったけど、だんだんそれも難しくなりお母さんは、着がえを持っていくだけになりました。顔を見ることができないので様子も分からないままただ届けに行く日が続きました。時々、看護師さんが連絡をくれていたみたいですが、会話することもなかったのでおじいちゃんはどんな気持ちで過ごしていたんだろう
と思います。

その頃、テレビでは感染した方が、残念ながら亡くなつてそれでも家族や親しい人と会えないままお別れをする悲しいニュースが流れていました。私達は、ただニュースをながめていることしかできないのですが、今までこんな話を聞いたこともなかったです。急に訳の分からない病気がかかつてしまつて最後まで大切な人に会えないのは悲しいです。人の気持ちは、一体どこへ行けばいいのか分からなくなります。患者さん、医療の現場で働く人、家族、どの立場の人もどんな言葉も出せばいいのか分からない悲しい現状に、何とも言えない気持ちになりました。

緊急事態が解除される頃、私は知りませんでした
が、おじいちゃんの具合は悪くなりご飯も食べられなくなつていました。亡くなる一カ月前、感染予防をした上で誰もいない部屋で会えることになつた時、言葉も出ないくらいおじいちゃんは、やせていて手をにぎることしかできませんでした。会えないことが本当に辛いとこの時思いました。

それからもう一度会うことができずお別れになつたのですが、しばらくよく分からず毎日を過ごして

いたように思います。緊急事態が解除されていたので、普通にお葬式を行う事ができたのですが、遠くはなれたおじいちゃんの兄弟は会うことはできませんでした。感染が増えたり減ったり状況なので、一年経った今も会えていません。一番心残りになっている事です。おじいちゃんは、コロナウイルス感染で亡くなった訳ではありませんが、色んな制限の中で思い通りではなかった事が多かったです。

命が一番大切ですが、世界中でウイルス予防のため、がまんをしている人がほとんどだと思います。感染して病と戦っている人はもちろん、医療にたずさわっている人、直接向き合わないといけない家族の人、制限だらけでどんな気持ちで日々過ごしているのかと思うと辛いです。そして、感染予防の為にいつも通りの生活を送れなくなっている人がほとんどです。仕事を失ってしまう人、学校に行けなくなる人、さまざまな状態から当たり前前のができなくなっただけが病んでしまう人も多いと聞きました。最近では、ワクチン接種ができるようになって少しは重症になる患者さんが減ってきているという

ニュースも聞きますが、まだ宣言が続いているところもありますし、日常を取り戻すには遠い気がします。生活の中でマスクをすることも、色んな行事がなくなることが普通ですが、本当に緊急事態だと思えます。誰もが自分らしく悲しみや寂しさを感じずに毎日を送れる日常に戻ることを願っています。

みんな同じ人間

赤穂東中学校三年 森 脇 遙

男女差別、障がい者に対する差別、人種差別など世界では、差別というものが日々絶えないうちで、自分やその周りの人と、外見や国籍が違うだけで、みんなその人を区別し関わりを持つことをやめてしまおう。暴言や暴力をする人も中にはいる。どうして、この世界から差別が無くならないのだろう。時々、テレビなどで、あるニュースが流れているのを見かける。それは、コロナ禍のアメリカで起き

た、アジア系の人々に対する人種差別問題についてだった。アメリカの各地で、アジア系の人々が暴言・暴力をされたり殺害されていたのだ。私は、同じアジア系の仲間として悲しかった。ただ、歩いているだけで被害を受けている姿を見て心苦しかった。

では、私はどうだろうか。差別はしていないのだろうか。思い出してみると、自分でも気付かないうちに差別をしてしまっていることに気がついた。

二〇一九年一二月、中国で新型コロナウイルスが発見された。最初は何とも思っていなかった。だが、時間が経つにつれてこのウイルスの恐ろしさに気付いてしまった。驚くべき感染力とパワーを兼ね備えるウイルスは、日本でも急激に流行していった。これのせいで、今まで当たり前だった生活が当たり前ではなくなり、多くの人が犠牲になり、部活動の大会や学校行事が無くなった。しょうがないことだと分かってはいたけど、悲しかった。どうしても中国を恨まずにはいられなかった。

中国の方々が日本に来日してくる様子をテレビで見た時、うわー日本に来ないで、この人ら全員ウイ

ルスを持つてるんじゃないか、とひどいことを思ってしまった。そして、街で中国人らしき人を見ると、ついじろじろと見てしまった。汚いものを見るかのような目で見ている自分がいたのだ。勝手に中国Ⅱコロナの国と決めつけ、中国人を嫌った。決して中国が悪いわけでもなく、ネズミが悪いわけでもなく、それを食べた人が悪いわけでもないのに。本当にひどいことを思ってしまった。コロナウイルスへの恨みや、何もできないことの悲しさ・悔しさは消えないが、中国の人を差別し嫌うことはもうやめようと思う。誰が悪いわけでもなく、みんなが同じように体験しているのだから。差別している場合ではなく、今はみんなを助け合い、乗り越えていくべきだと思った。

差別をしない人間なんてこの世界にいるのだろうか。誰だって固定観念というものがあると思う。どれだけ心が優しい人でも、器が広い人でも知らないうちに、顔や肌の色、体格など見た目で判断したり、障がい者や同性愛者などを理解しようとしなないと、自分でレッテルを貼ってしまったのではない

いだろうか。白人より黒人の方が怖い、障がいを持っている人は「普通」ではない。勝手に他人の人柄やイメージを決めつけてはいないだろうか。みんなも私も自分を基準として周りを見てしまっているのかもしれない。それにより苦しむ人がたくさんいる。少しどころが違うだけで、暴言・暴力をすること、嫌がらせをすることはしてはいけない。差別を行動で表すことなく、せめてみんなが心の中に留めておくだけでも傷つき苦しむ人が減ると思う。

この世の中には、まだまだ差別する人、される人がいると思う。私たち人間一人一人には、個性がある。感じ方はもちろん、考え方だってみんなそれぞれ違っている。差別をしている人には、みんな違ってみんないいんだということ、違うことが当たり前なんだという事を分かってもらいたい。そして、自分がされた時どう思うのか考えてほしい。されている人には、差別されるようなことは何もしていないから、今の自分に誇りを持って生きてほしいと思う。差別を少しずつでも減らすには、差別というものが何かを理解する、その人の個性やその国の特徴を

知るという事が大切だと思う。例えば、障がいを持つ人が困っている時、少しでも助けてあげる、迷信や慣習などを問い直し疑ってみる。こういった小さな積み重ねで、その人と関わるきっかけを作り、イメージが変わっていくと思う。

私は、誰一人として差別により苦しむ人がいてはいけないと思う。どんな人であれ、みんな同じ人間なんだから。生きている限り、みんな一人一人に人権がある。この一人一人の人権や個性を大切にし、尊重される世界になってほしい。

いつか、この世界から差別が無くなりますように。

高齢者問題について

坂越中学校三年 川 本 梨 乃

私は最近高齢者について考えることがよくあります。その理由としては、私のおばあちゃんは一人で住んでいます。そして、おばあちゃんは病気を患っ

ていて、最近更に症状が悪化しています。毎日とても心配で、病院に行かない日は頻繁に行くようにしています。

おばあちゃんは毎日体調の良さが大きく違います。ですが、最近はいつも体調が悪いです。病院から帰ってきた日はいつもよりもしんどそうにしています。一人で住んでいるので不安も多いでしょう。そんなおばあちゃんとたまにお買い物へ行く時があります。車へ乗るまでの道のりだけでもしんどそうにしているおばあちゃんを見て、いつも私は手を貸して寄り沿って歩いています。すると、おばあちゃんはいつも嬉しそうにしてくれて、

「本当にありがとう。誰かと一緒だったらとても心強いよ。」

と、言ってくれます。私はその言葉を聞くととても嬉しいし、良かったと安心するけど、どこか少し悲しい気持になる時があります。

おばあちゃんは一人で暮らしているからとても心細いはずだし、不安だらけだと思うのに、私や家族という時はそんな顔色を一つも見せずに明るく接し

てくれます。そんなおばあちゃんは本当に強いと思うし、私の自慢のおばあちゃんです。

私と話している時、病院仲間さん達と話したことをたくさん教えてくれます。その話しをしている時は本当にとっても楽しそうで、おばあちゃんにとってこの人達は本当に大切な存在であって、こういう交流を無くしてはいけないと強く思いました。

私は、おばあちゃんと血の繋がっている家族だけでなく、病気の苦しさや大変さ、心苦しさを分かっていると、言われても、理解をして受け入れて何かしてあげられることしかできないけど、病院には、同じ病気と戦っている人やその他色々な人がいるから気軽に話せて、お互い共感し合える人達がいるという場所は、本当に大切にしていけないなと思います。

また、高齢者は私達よりも視野が狭く、か弱く、単純な運動をただけでもとても疲れてしまいます。そんな高齢者達に私達若者ができることは、サポートをする、より住みやすい環境を築く、高齢者を大切に理解することだと私は思います。

今、高齢者の人口が年々増えてきています。

そんな少子高齢化の時代の中で高齢者達をいかにどう住みややすくするか、逆に自分達が高齢者になった時、どのような世界であってほしいか考えて、今から自分達が創り上げていくことがとても必要になってくると思います。

私は、今まで高齢者について深く考えたことがありませんでした。ですが、私のおばあちゃんのおかげでよく考えてみたら…と、たくさん思ったことや改善した方が良いことなどがたくさん見つかりました。

今の時代の若者の一人として、高齢者への対応、そしてこれからの高齢者へのために、今自分ができるところを精いっぱいしたいと思います。

高齢者が暮らしやすい社会へ

有年中学校三年 鈴木 美咲

私は今、家で祖母の介護をしています。立ち上がっ

たり歩いたりするのが難しくなったので、一緒に歩いたり立ち上がるお手伝いをしたりしています。その中で、ケアマネジャーの人と会ったりして、介護に関する話を聞きました。そこで、高齢者を取り巻く問題やこれからの社会のあり方について調べてみることにしました。

まず初めに日本の福祉の現状について調べました。国民の四人に一人が六十五歳以上という超高齢社会になっています。医療分野の発展や生活の変化などにより少子化が進んだことによります。高齢化が進むと、経済成長や社会保障制度などにも影響が出ます。経済成長では、高齢化と少子化の進行により労働力が減少し、社会保障制度では、医療や介護費を中心に社会保障に関する給付と負担のバランスの崩壊につながります。様々なところに問題が出るのだな、と驚きました。今後も高齢者人口は増加すると見られています。この先、人々の負担が大きくなったりすると、大変だなと思いました。

次に福祉の問題について調べました。一つ目は、介護難民です。介護難民とは、介護を必要としてい

るのに施設に入所できなかつたり、家庭で適切な介護サービスが受けられない六十五歳以上の高齢者のことです。介護が必要なのにサービスを受けられないと、生活するのも大変だろうし、けがをしたりと危険なこともあると思いました。

二つ目は、高齢者が高齢者を介護する老老介護です。体力的にもしんどくなつたりして、介護する側もとても大変だと思います。結局介護が続かなくなってしまうこともあると思います。

三つ目は、高齢者の一人暮らしです。認知症になつて一人で日常生活を行うことができなくなつたり、孤独死などが起きてしまうことがあります。家族、国、社会の取り組みが大切です。家族で対処できないときには、民生委員などに相談したり、介護保険制度や見守りサービスを活用することもできます。地域とのつながりをもたせることも大切です。そうすれば、何かあったときに誰かが気付いてくれます。困ったときに助けてもらえると、本人も家族も安心だし、地域の人と関わることで、一人にならず、孤独死を防ぐことができ、とてもいいことだな、と

思いました。国や自治体に支援を要請することも必要です。この他にもたくさん問題があります。だからこそ、高齢社会の問題を理解し、どのような取り組みが必要か、一人一人が考えていくことが必要と分かりました。

私は、今回調べて、様々な問題があることを知りました。でも、社会と助け合うことで負担を減らしたりできると分かりました。今後も、高齢化はどんどん進んでいくとみられています。だから、一人一人がしっかりと理解して、家族だけでなく、地域や社会と助け合っていくことが大切だと思いました。私も、まずはしっかりと理解して、困っている人を助けたりできるような人になれるようがんばります。ときどきでも、祖母の手助けをできるようにしたいです。



高校生以上の部 大賞

笑顔の素敵なあの人になりたい

赤穂高等学校二年 安部 栞 菜

「おはよう。」

私が学校に自転車で登校している時、毎朝同じ時間に、同じ道で朝歩いていて、素敵な笑顔を浮かべて挨拶を下さる地域の方がいます。私はいつもその言葉と、その笑顔を見て、温かくて幸せな気持ちになります。些細なことだけれど、その小さな出来事が私の一日の励みになっています。そのおかげで、毎日楽しく学校に登校することができています。そんな方がいるからこそ、高校生である私たちの心は優しい気持ちにさせられているような気がします。

私たちは、街を歩いている人の四人に一人が高齢者である社会に生きている今、人が幸せに歳を重ね

るためには何が必要なのか。私は、高齢者について、知っているふりをしていただけで、あまり知らず、深く考えることが今までありませんでした。私たち高校生もやがて歳を重ねていくからこそ、「高齢社会」は自分の人生の延長線にあるはずだと思います。ですが、今まではいぶん先のことだと思つて、身近なこととして捉えることができていませんでした。しかし、いつもの明るい地域の方を見ていると、「長寿の時代に生きる高齢者は、どんな生活をしているのだろう。」と疑問を持ち、高齢者は、日頃の生活で不安なことや、私には見えていない課題があるのではないかと思い、高齢者の抱えている問題について、もっと学び、私にできることを考えていきたいと思うようになりました。

高齢者になってからの健康は、若い時からの生活習慣が影響すると言われています。コロナウイルスが流行ってから、外出せずに、家にいる時間が増え、消費エネルギーが少なくなっていたり、運動時間が減っており、筋力や体力が落ちてきていると言われています。そんな中、一人でもできる運動や、健康

な食事を意識するなど、私たちにできることは沢山あるはず。将来、誰だって高齢者になるので、私も改めて今から生活習慣を見直して、健康な心と体を作っていかななくてはならないと思いました。

便利な今の時代、食事や、お風呂の介護、話し相手など、何でもしてくれるロボットが最近話題になっていきます。高齢者は、孤独から逃れようと、ロボットと一緒に過ごす人も年々増えてきて、機械に頼っている人も多くなってきています。しかし、高齢者が健康に過ごすためには、自分で体を動かすことや、一番大切なのは、人との関わりを深め、人の温もりを感じるのだと思います。私にできることは、まず、地域の人たちとのつながりを大切に、いつも「おはよう。」と言って下さるあの方に負けないような、明るく、笑顔の素敵な人になりたいと思います。また、これから高齢化が進んでいく社会において、年金を納めたり、税を納めたりする、間接的な支援だけではなくて、地域のボランティアに参加して、コミュニケーションをとったり、直接的な関わりをもっと増やして、心の扉を開いて接す

ることが大切だと思いました。そして、私も、おばあちゃんになったら、私がいつも元気をもらっているように、誰かに元気を与えられるような高齢者になりたいと思いました。



障がいのある子の未来を考える

一般 森 本 由香里

彼は自閉症という発達障がいを持つ私の子供です。自閉症の特徴として①社会性と対人関係の障がい②コミュニケーションや言葉の発達の遅れ③行動や興味の偏りなどがあります。彼も御多分にもれずこの特徴を兼ね備えています。幼少期ある程度の年齢になると少しずつ親から離れて子供どうしの世界に入っていく能力が備わるらしいのですが、我が子においてはそういう様子も見られませんでした。幼い頃には、ひとつの玩具を取り合いになったり、公園のブランコも「私が一番だ。」とか「僕が一番。」と取り合いになったりしますが、彼は一向に興味はなく、砂場で砂がサラサラ落ちるのをじっと見て一人遊んでいました。(何て聞き分けの良い子なんだ

ろう。)と心の中で思っていました。幼稚園になり集団生活が始まりました。勿論彼は集団に入っていない歌もお遊戯もできません。彼にとっては何の興味もなく、ただ苦手な多勢の集団の中に入れられどうして良いかわからず、パニックを起こすほど辛かったのだと思います。社会性が乏しくコミュニケーション、対人関係が作れなかったからです。

それからというもの自閉症の特徴は顕著に表われます。大人になった今でもそれは例外ではなく今日も(小さな白いハサミ。)とこだわっています。これは行動や興味の偏りがあるからです。言葉の遅れもあり、「ちゃんとしなさい。」「それ、あれ。」と言った抽象的な言葉は今もなお理解ができず困り果てた顔をします。スーパーに行ってもこだわりがあり、おやつはいつもの駄菓子です。お菓子売り場に直行し自分の好きな物を買えば満足です。本当は人の多勢の所は好きではないのですが、その時ばかりは平気なのです。周りが見えていません。スーパーで出会う子供たちは彼の行動が不思議なのだと思います。何度も何度も振り返り、見てはいけない物を

見たような、変な人、なので。無理もありません。見た目はれっきとした大人なのですから。彼は社会性が乏しいからです。以前は親の私の方が気にしていました。親の私も少し成長して（わかってないんだな。こんな障がいを持っている人が存在すること。）（こんな人もいるんだよ。）と思うことになっています。この件にかんしては（学校教育の中で少しでも理解してもらえばなあ。）と思います。知ることによって差別や偏見がなくなれば良いと思います。

自閉症の特徴は本当に奥が深くこれがすべてではありません。意味もなく体に触れられるのも苦手です。そういえば手繋ぎも出来なかつたなあ。いろんな要素が入り混じります。ある程度経験を積み上げていくと意外とすんなり生活が出来る様になります。彼は毎日のルーティーンの中で安心して生活しています。こういう複雑な障がいを持った彼の未来を考える時があります。親も年を取って彼と一生生活するのは難しい時が来ると思います。（親は多分彼より早く死ぬ。）彼をどうしてあげれば彼は彼な

りに生きていけるのだろうと思います。彼の特徴を理解してくれて彼は彼なりに生き生きと安心できる所がいいなあと思っています。そのための準備にも心を配っていかねければなりません。何せ環境が変わることが大の苦手ですから。この先、彼が安心して生活できるそんな所に託せられたらいいなあと思います。

東京パラリンピックが開幕されました。世の中の人が何か感じてくれたらと思います。なかなか厳しい世の中の状態ですが、みんなが共存できるやさしい世の中が来てほしいと思う今日この頃です。



思いやりと優しさが築く未来

赤穂高等学校二年 北岡 茉凛

福祉ってなんだろう。そう考えた時に、私は、自分自身のことを思い浮かべた。

私は、右耳が難聴である。小学三年生のときに告げられ、もう八年が経つ。右耳はほとんど聞こえない。そんな私が今日まで楽しく生きることができているのは、周りの人の温かい支えがあるからだと思う。

この世の中には、持病と共生している人たちが沢山いる。目や耳、足や手、臓器など自分の持病と闘い、更に今より共生しやすい社会への発展を望んでいる。そんな未来を築いていくには、一人一人の思いやりや、優しさが必要であると思う。

私は、小学校の授業で、アイマスクをした状態で

歩いたり、車椅子を操作したりすることを体験した。そのとき、足元が見えないことの不安と恐怖、車椅子の操作の難しさを痛感した。今まで、街で困っている人を見かけると、心のどこかで他人事にしていく自分がいた。しかし、今、不安や恐怖を抱えている人がいることを忘れず、そんな人たちを見かければ、温かい声をかけたり、困っていることがあれば、少しでも力になれる行動をとることが大切であると、改めて考えさせられた。そして、この体験の重要性と必要性を感じ、今後もこのような授業を行い続けるべきだと思った。

私たちは生きていく限り、衰えたり、病気になったりする。これが全ての生物の使命であり、任務でもあるように思う。だからこそ、誰もがその苦しみを分かち合ったり、助け合ったりしなければならぬ。それには、必ず思いやりと優しさが必要不可欠であり、人間一人一人が必ず共通して持っている唯一の感情だと思う。これからは生きていく私たちは、特にその対象であらなければならぬ。

少しの思いやりと優しさできっと誰かを笑顔にす

ることができる。そして、私もその一員でありたいと思う。お互いがお互いを思い、リスペクト（尊重）し合うことが当たり前に行ける、今より更に良い世の中を築く為には、まず自分から、そんな人になる努力をすべきである。

寄り添える社会へ

赤穂高等学校二年 桑 原 悠 人

新型コロナウイルス感染により、世界中が混乱しているなかで、ようやく日本でも高齢者によるワクチン接種が始まった。

赤穂市でも予約接種が始まり、高齢者に接種券が発送されました。私の祖父母も心待ちにしていたので喜んでいたのですが、予約方法が電話、ライン、ウェブでした。そして、赤穂市よりも早くに予約開始した市町村で、ウェブやラインでの予約でほとんど埋まり、電話での予約は電話が繋がらないし、予

約枠が埋まってしまったため予約できなかったという事例が多く発生したことが分かりました。そのことから、電話枠〇件での予約が新たに設けられました。そういった改善はとても大切なことだと思いましたが。しかし、そもそも高齢者にどれくらいウェブやラインが普及されているのだろうか。

私の母方の祖父母はスマートフォンを持っていません。しかし、操作で分からないことがあればよく私に使い方を聞いてきます。持つてはいてもインターネットはほとんどしないし、操作も遅いです。しかし、予約開始の日が平日だったこともあり、何とか周りに迷惑をかけたくなかったのでしょう。祖父は自分で予約するために、予約が集中するであろうと予想されるので、事前に母に教えてもらって何度も何度も予習していました。母も早く祖父母にワクチン接種をしてほしかったので、仕事の時間をずらし予約の手伝いをして行っていました。母が祖母の予約を取ることになりましたが、祖父はその横で自分の分を予約することにしたのでありますが、祖父は練習したのに慣れない操作が不安で、何度も何度も横で祖母の予約を

取っている母に確認しながらしているのです、その間に次々と予約が埋まっていったようで、結局最後は祖母の予約を終えた母が代わって祖父の予約を取ったそうです。

父方の祖父母は電話しかありません。それにウェブやラインが何かも分かっていないので、予約当日、父は有給休暇をもらい予約をしに行きました。予約完了しワクチン接種の当日は、父方の祖父母は車を持っていないので、子や孫が交替で仕事に都合をつけて送迎しました。私の祖父母は、出来ないことがあっても今は周りが助けられる環境にあると思います。

新型コロナウイルスのワクチン接種により些細なことなのかもしれないけれど、高齢者がウェブやラインなど聞きなれないワードだけでも不安になってしまうので、操作が分からない人はスマホを使える私たち高校生や大学生が予約の代行が出来るようなシステムが初めから取られていれば、混乱せず安心して予約できたのではないかと思いました。今は改善され無料バスの運行などがされていて大変良いこ

とだと思えますが、もう少し早く高齢者に寄り添って考えていけば初めから対処できたのではないかと思えました。

多くの高齢者は一人でどうしようもできないことと、周りに頼れずいろいろなことを諦めていることがあると思います。そこに気付き、寄り添える社会が必要だと思えます。私はまず身近な祖父母にそのようなことのないように、不安を取り除き、いつも笑って生活してもらえるように寄り添い生活していきたいです。



自分たちが支える

赤穂高等学校一年 大谷 庵

私には、優しく、野球が大好きなおじいちゃんがいる。私が小学生のころから、野球の試合がある度に応援しに来てくれて、感じたことをいつも電話で教えてくれる。

でも、元気だったおじいちゃんが二年前に外出した際に急に倒れてしまった。そこから立ったり、歩いたり一日前には当たり前に出ていたことがやがてなくなってしまう。私も心配の気持ちはもちろん、一つの行動でこのような状態になってしまうという不思議な気持ちにもなった。

今、この世の中は「高齢化」が進んでいる。でも、年々増えてきている「高齢化」を止めることは出来ない。そんなお年寄りの方にも毎日が楽しく暮らせ

るようにと改善することが大切ではないか。また、私たちが、お年寄りの方への支えになることが大切ではないだろうか。

日本は決して、不便ではないと言い切ることはできない。

例えば、最近は少なくなっているが、スロープなどのユニバーサルデザインが設置していない所があったりするの事実だ。

ユニバーサルデザインとは、「すべての人のデザイン」という意味があり、子どもから成人、お年寄り、男性、女性などすべての方が安心、安全に暮らせるために設置しているものだ。特に、私たち高校生のような人ではなく、一番必要とするのはお年寄りの方や、体が不自由な方だと思う。だから、すべてが便利な物にすることはできなくても、みんなが安心、安全に暮らせるために、最低限のことはすべきだと思う。

でも、自分たち高校生の力でスロープなどのユニバーサルデザインを設置したりすることは不可能だ。私は、お年寄りの方の支えになることが私たち

自身が出来ることだと考える。

自分たちが、お年寄りの方のためにユニバーサルデザインになろう。

荷物をもつことや、近くいることなど、ほんの少しのことだけで一人でいるよりも、安心・安全にそして、楽しく暮らしていけると思う。それ以外にも、お年寄りの方のために出来ることはたくさんある。だから一人一人が考えていくことが大切になると思う。

おじいちゃん、おばあちゃん、近所の方など身近なお年寄りの方だけでもいいから、支えになってあげる。

歩くことや、立つことなど自分たちなら当たり前に出来ることがやりづらくなってしまうとおじいちゃんですが、私の中学生になっての最後の大会も応援しにきてくれた。

いつも、応援してくれているおじいちゃんを次は私が支える番だ。最近はおじいちゃんを会えないけれど時間があるときや、用があるときにはおじいちゃんの元へ行って話をしたりしたい。さらに、高

校生になっても応援してくれているおじいちゃんの期待に応えたい。おじいちゃんがいつまでも楽しく毎日を暮らせるように次は私が頑張っていく。



この冊子は、共同募金の配分金で
製本いたしました。

ご意見、ご感想等ございましたら下記までご連絡下さい。

〒678-0232 赤穂市中広267

赤穂市社会福祉協議会(総合福祉会館内)

TEL(0791)42-1397/FAX(0791)45-2444

E-mail ako-shakyo@ako-shakyo.jp

福 祉 作 文

令和3年12月発行

編集・発行：社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

